

先月末から来日していた台湾の李登輝前総統が滞在最終日の9日、日本外国特派員協会で記者会見を開いた。

1988年、蔣経国総統の死去に伴い総統を継承した李登輝氏は、96年、台湾史上初の総統直接選挙を実施、民主化を実現させ経済発展を導いた。「開発独裁」型が多いアジアの指導者としては稀有な存在で、国際的評価は高い。

一方で台湾の独立を掲げることから、96年の総統選挙では中国から台湾海峡にミサイルを撃ち込まれるなど、中国との関係を緊張させた。

総統就任後、退任後と幾度も来日したが、中国に気兼ねする日本政府は東京に入れさせなかった。総統就任以後の東京訪問は今回が初めてである。李登輝氏が7日、実兄の祀られている靖国神社を参拝したことに、中国外交部は直接の言及はさけた。だが李氏の訪日については、入国を許可した日本政府に強い不満を示した。

政権の座を降りて7年も経つ「過去の人」だが、日本での行動にはマスコミの注目が集まった。日本外国特派員協会での記者会見には、「日本の首相でさえもこれほど集まらない」と言われるほど多数の記者・カメラマンが出席した。

司会者は皮肉とユーモアを込めて「PRIVATE VISIT = 私的な訪問」という言葉を繰り返しながら李氏を紹介した。

京都大学で農業経済学を学んだ前総統は達者な日本語で「日本文化」「アジア情勢」などについてスピーチした。「奥の細道(道程の半分まで旅した)」の魅力や「日本人の遵法精神」などを“外交辞令”を交えて褒めた。25分間、大きな声で話は淡々と進んだ。



李登輝前総統。こぶしを振り上げて語る姿が84歳とは思えぬほど元気だった(日本外国特派員協会。撮影:いづれも筆者)

ところが記者との質疑応答に移り、「靖国参拝」や「中台関係」について聞かれると様相は一変した。

「靖国神社参拝は、外国政府から批判される云われはない。なぜ問題が発生するかというと、コリアや中国大陸が自国で処理できないからだ。」「中国が『台湾がどうのこうの』と言っても私はビクともしない。」「国際的に台湾の主権はあいまいだが、台湾の人々は主権のある独立国家だと思っている」。

声を荒げ、こぶしを振り上げながら語る前総統(写真)は、「心臓を患っていたというのは本当なのか?」と思わせるほど元気一杯だった。だがその姿こそが国際情勢に翻弄されながらも経済発展を遂げた台湾のエネルギーを現しているのだろう。

李登輝氏が1996年、総統の直接選挙を実施したことに、中国が台湾海峡にミサイルを撃ち込み、独立への動きをけん制したことは前にも述べた。この時は米国が空母2隻を現場に急派し、とりあえず事態は収まった。だが、これを機に米国は日本に対して集団的自衛権行使の「研究」を求めてくるようになる。「改憲」への素地として今につながっていることは言うまでもない。

日米同盟にも少なからぬ影響を与えた李登輝前総統は、「『奥の細道』の残りは次回の訪日で旅する」と言い残して日本を後にした。

<http://www.news.janjan.jp/world/0706/0706096984/1.php>



東京まで来たのは総統就任以後初めてとあって、カメラの砲列ができた。



支持者たちの熱狂的な歓迎を受けた。